



松  
 栢  
 集  
 卷



170

180



御

夜子養あり 御と相柱と呼ばるる 孝の  
めと 子より 柱の花の 清純を 由て 用由  
武都子 相親純あり 其の 周子 以て  
老あり 若士の 原子 去る 歌子 之十  
秋 何言し 孝 鄭子 使川子 遊ん くの 子  
早 森に 風 原 急 瘧を 足 跡の 遠 命を 守て  
うく 道 業を く 教 由 近 在 近 御の 幼 幼の  
風 子 等 子 之 川子 去る 子 集り 志を 之の





のひきききの甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
叶ふ一冊の甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
例を備へてその甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
仮名あつてその甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
その甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
かゝるに古人の甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
その甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
とてその甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
おもしろき事なりとて撰りて

洋の書を出し御書内より書りて  
りて一冊の甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
あつてその甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
乙子附一冊の甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
その甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
乙子附一冊の甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
あつてその甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
乙子附一冊の甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
あつてその甲乙と云ふ事なりとて撰りて  
乙子附一冊の甲乙と云ふ事なりとて撰りて



許さるるも粗おのまゝ〜評者の如くとい  
 つも大緊初の出〜此集子評者  
 何んぞいおるよるうの亦く風流の  
 業もあやをゆんお〜杉桂と業とも  
 明んるよと志りしよ

東都

松雪路尾馬吟歌



四季混雜 月次連

け川鶴小窓河の風多ハ那かをり  
 児をたま〜く市利友をかぬ  
 風分り〜梅、香うめよ歩〜ぬ  
 あき〜冬〜杉も柚味〜乃白いぶ  
 氷已候た〜ちに鶴のをと喜う那  
 又通小川〜ハ〜杉野了南  
 凍〜心やおぬ様れ薄〜一話

上ノ何  
女

英紅

花春

連枝

松本丁

東葵



味うおきき急や茶は花ちりやまじり  
やと小徳羽ういふ萩は晝いふ  
りやお茶は茶をぬむ想う能  
其神や聖は浮たう是れあま  
湖乃庵まきく月れいうぶ  
菫入や母におし一ふ仕立との  
みまうお矢直を振くりあま  
細れ目とぬけく一船の舟か南  
あ干れさくく是くく萩 柳

赤葵

左来

井乃

初文

柳所  
萩由湖

蓮葉や凡丈小足くぬ佛 蓮  
夷濤音了碎——寺小姓  
あの中小わつる一本やま川橋  
ああいふふれやせ萩異さう那  
鯨はく滴を糸糸にかえまら  
流き急よ萩本川の急な  
種子れむつ々々く起くと船の音  
花小くく茶聖にゆる萩蝶うね  
あゝ奥や是も鯨とうとハ矣

其風

小忌  
当線

木子碓

仙步

素生



くさばあきや川を隔く花乃を  
餅つきや大乃尾とみる川此口  
植うえる木小春由れあくと南  
日くすやうに思ふに啼より別  
音聲や雨も日あそと花乃はや  
錦匠や七日うそひ茶さかり  
赤素瓜のうちは床しき白ひが  
まの鳥れごふおれやあゆも  
賣くやうよにほりうまれ声

素牛

素牛

素牛

員玉

一笑

一笑

一笑

松由

ぬれ草をさるや残帳の約を  
松さ九や木の之日月乃色の雫  
あゝ節ねき木に更したいとこ  
玉字をこれ肉乃を月ちやさうく  
潮のをききく時と高もが那  
豆のうけや日傘にかざる道の端  
餘はきや文と五尺よあし終も  
昔の聲や花も花と一はくも  
思ひもさうれあはれは月式

風光

松枝

約瓶

秀舟

秀舟

秀舟

卜泉

卜泉



忽ち月と心とわたりし本とてあはれ  
稀く伝へし心とてあはれをまじり  
鯨つき鷲も多栖と名きりし  
景れ景や山の仇あはれをまじり  
多ぬるむらや馬うし鏡とき  
相終やはや一傷の志願ある  
少うのあはれ骨あはれをまじり  
霜降く心とて景れ景れ風味が  
川の色や志願に布を飾りし

卜籠

時春

追水

五介

作志

梅鏡

下流田

陽あや湯と焼目も屋うまに  
美景野をるに味し花を何  
ま川青と月と美する秘めが  
うせし子小森而廣き味をうま  
萍や貝日くし風吹か  
聖横よまの海まらるる海の南  
梅の雷や煮一と心景れをまじり  
山路り月や剝みと色あはれ  
獲すたや馬上の影とてむら

夕西

如川

相盛

野色

李吉

里抱

如扇

所田



又終ら月此夜小出よ帰る 厩  
麻の子や是く是く 糸糸よえ  
草餅や何より 水くハ香くハハ  
茶の茶や何れも ちまき終りり  
あま乃くくく 又挽やを 夏此山  
破るぬく馬れくハ 丁菜ハウ那  
吾魚やハ夏まき 花の月ハ法き  
隠きあハハハハ ちみそまお  
芋も赤くハハハ 穂はを

去庭  
文和

有瓜

破水

職探

須笑

長春

あつと火此中 廿二の月 此堂下那  
蕨の葉に似ハハハ 山ぬものや 是此茶  
をさくハハ 山對くハ 糸糸ハハ  
酒くまむ 梅ちハハ 秋此物  
杉の風ハハハハ 秋ハハハ  
山寺や涅槃とハハ 油ハハ  
海ハハハハ 山ハハハ 翳啼  
苗代ハハ 人ハハハハ 多ハハ  
山形ハハハ 相ハハハ 葉ハハハ 此完

羽場

涼鬼

金瓜

松笑

依什

廿肥重

南紅







象山に鐘う先うけそ神をあら  
一ふしの舟にまをれ花火の舟  
鐘お終を日をえんそ重むらる曆  
川指や子縁とくく牝乃はる  
萬葉の風よ吹くすのこが  
吹きてハ葛那きとあ記美奈ふ  
峰入やひさうらと並れ人あうん  
海舟れともよきうやふの藤  
ふそくそ藤の若草日く白ふ

戸の  
六扇

志水

万紀

柳疎

文志

雄智

志若  
志若

秋海棠きくや斜小日れ移り  
幾少きくやきくくにあきる夜  
善美れ又とひのある物をり  
とくく雀や胡蝶乃氷と啼記  
名月や花と七葉の思ひ丸を  
鶴の舞をまよ入毛も又あつれ  
冬啼やあぶ啼乃時を始  
孫も人今や草木は芽くむはれと  
春風よ吹延きく日くく

山和

下下  
軽危

折久保  
山核

後保  
玉園



正東にあいふもかゝりしる経い  
松風や雪と心やうと麦のふ  
豆鼓や石乃相と花の中  
又きしれ花を足れきし急豊原  
紅梅や法布と此地のあゝおほ  
袋のりゆ中と深り利かたはあ  
神をの鶴つとちきい森えのう  
謂す我と志しはよあめ賣  
ちりか系花と仇あり春の仇

系

山水

文志

君田  
柳之

羽仙

眠井

老ぬきとまぶさ系花と一節系い  
湯丸きき花のう志経や牡丹如  
柳経や小僧と来とも坊り明  
ちりか發て足とも興ある梅式  
無啼や伏りしし西海矢うし弁  
柳と雪や書院の涼子と幼ぬ  
神きしれ花と此地のあゝおほ  
梅と雪と花つとち此丘の経のきぬ  
七種と心つと目かきれ白ひし

口括

此南書

宗光

下  
あ  
又

梅家

梅清



出代や種子とちり〜乳母も泣  
ちり〜交ひ啼や木のるに古月  
古き小室を子ぬもやの〜涅槃像  
山茶湯や煮らる〜埃乃つ徒寺  
新定れあぶ不メや喜す〜先  
所〜巻あや名月の束れ牡丹力  
伝連地〜木とさ〜や帰花  
大名乃能をワ〜行しる〜事  
道あり〜及と跪り〜今物の色

若桂寺

如碎

数桂

和抱

杜哉

音考

沼次

雛の如這あふ子れ笑顔の事  
喚も〜其日路里乃木橋外  
冷渾も那と筆に及ぬ菱葉外  
ふ露れ花もも色〜ゆより  
君乃〜橋ま〜り〜蘇乃ふ  
花寺れか〜やの村の隣うぬ  
卯の茶と毎日れ月や郭云  
きり〜民藝にう侍もる壁穴  
啼ふ鳥夏に浮橋か〜り

梅抱

石川

石喜

壺外

山胡

一卜

兼舟

鬼笑

上牧



を在茂葉に伊寺小性此湯きり  
きし此花の地く尾意のちる目  
雨もろ乃如まのすれ新清水う  
吹は九ふふ吹きく一橋乃風  
飯屋釣て森訓ぬうちをく  
この中此声度くや今朝の音  
給中海に飯とも給志  
啼りりく山守はきく神を  
明月や丸きいさを歌す歌き

川  
尾上

石  
柳山

石  
花林

石  
雨和

石  
松花

石  
鳥川

石  
柳意

石  
摩意

石  
春水

ひまきんよ親子正一や今朝の音

下牧

菜園

川指に給せ一場所やなく鉄

い流くよ森も半く一あま歌き

翠野

着訓てら二十ま此夜の金糸の車

橋垣に給みめく生く一花うつ木

花生

荒磯や柳かある一日乃ゆ花

雨花

霜除小葉を抄の川う一椿の歌

花柳

この川流も果なく一海にく

揚花

下宮をかぬきく一足れ八日おの車

花柳



ありき月や中ふ原涼し秋飯も  
 縁をぬく日と夜を——ワの金霜  
 五月雨や水那き小田にあふれり  
 春と数うすきを月乃珠う車  
 女支申漏多伝致屋れ中もえり  
 茂り葉北中や反哺乃雛うと  
 菱花つむあち女思ひやれり  
 晴るる今宵此月や八百里  
 秋るもや草の西乃柳うけ

と久屋  
 山栢  
石葛  
 梅川  
 素吟  
 淡川  
 秀意  
城門少年  
 曉写

水と不託死竹て秋るあうをう原  
 あり仙や宮う一も中をえはう水  
 涼しきや懸う河原くきかきう秋  
 神事風よ大紋此袖婦のをりり  
 草花実此皆有るに枯野原  
 あり角紋うと白布む竹此中  
 あり男ひの形く好菱書れ日殺う形  
 名と系瓜は系形つうや化類あり  
 藪入や常伝にきうと女長鳴

かま  
 因和  
町少年  
 清月  
井上と  
 風柳  
下井  
 素意  
 白岩  
 南畝  
下巻初  
 梅楚  
祭知  
 連和



山と夕日 紅く 小葉乃 春の南  
銀い 遠く 梨も 井底の 徒も びり  
去馬の 野火の 燐も 雪の 中  
風あ びて 今 胡と なる 春の 幹あり  
鴨の 川や 湊る 急く 飛 柳 舩  
寄れ 野を 送と 根の えきりり  
大霜や 葉は 葉 枝をも 草 乾き  
死ぬ 時と 志ぬ 心も しく ぬくと 計  
道は 其れ とも 系 生を や 録乃 あり

杭風  
古葉  
牛賦  
橋尾  
木子  
河文  
巴紗  
志斗  
心笑

雪に 籠り 古れ 翠の 乃 中 紅き 里  
徒よ 暮て 来 あり 枝を みる 春  
つま なる 層 舟に 入の 勢 此 以 映す  
ぬせ とも の 能 毛 蓋し しく とも 毛 霜  
ざん なる も 衣 士と 江戸 へ 花の 春  
あさ 色を ちか しく ぬ 山 根の 形  
涼し さまと 破 訓 松乃 枝 あり けり  
あま 来と とも あり とも 庭の 春 あり 哉  
常し とも あり 月 日 あり とも あり あり

赤松  
下久屋  
梅城  
一至  
戸中  
一志  
只の殿  
古柳  
旭水  
馬を



負勝とあふにこそ志きし鶴合  
志橋やまのきこふと竹亦き  
戸さくせぬ昔れ庵や梅乃月  
を川原より筑波一日等より危  
日に疲し人もおろし夕涼も  
庭の若葉増大も糸くも蕨式  
八重中へもいと見に返る木槿式  
志く枕よ二日お月のおりう水  
梅り音やあうひさししと纏すも志

一宗  
泉静  
東生  
里香  
吳弁  
豊苑  
壺口  
蟻徒  
知少

生石

志くもや一層にりのきく夕柳  
志けしきよ夏の不二く神宮  
志乃志乃志乃しきあき志の南  
志草や浪もろ流るし右たり  
卯月寂中血を吐るをけりあう形  
ワのれ志を又新花れ山路の  
志垣守れ清士と我志の火鉢志  
志那のれくこりふ志あうや橋の志  
夕秋や夢つんぬあや志夢れ志

平出 涓好  
柳奇  
南宴  
系水  
龜睦  
菅平  
龜水  
花林  
小柳

下在後文



涼しきよき面よ露のたれを以

六井七

池畦

連外

清光れよのに志をらん后れ月

江戸

清風

細おや名のと砂は〜園を寺

友之

子子やしら〜ぬ神の手を結

卯木

お月夜〜言ると春は休の南

紫涼

翠の爪に不計其寂と驚きぬ

其柳

めりる花れ白ひ〜跡き牡丹式

夢足

楠の恋濃と写お利限〜河を

与勢

故尾泊や浮世よ愁乃氷〜人ハ

鍾夢

夢啼や寝よ名を那にをあきと

虚白

橋ち〜やう海を〜あ馬北面

戲語

総引や猪負も共か〜めくぬを

一鳥

城内

橋と〜つ志を〜る蓮つんす

数氏

花衣の扇もや雪をれ移〜かな

兼菰

女多意みき不正〜ぬ枯〜り

素秋



も川きうとせぬとさめや新月  
志かふしと後雨をうらむ格  
其音もくもてあやしく妹の襟  
さきよゆき竹のぬれをぬき結  
潮風は帯と小おやりのき居居  
地は角やちがらのくもを所  
さかえとと子入もあふん湯花  
菊菜は人笑をたのめ橋うも  
ふし女と云ふも一日二日か

物舟  
後河  
松風  
塵舟  
何本  
樂水  
不写  
玉之  
一貫

も代も云葉すくあき、男の事  
高き將や入交りくも君と君  
名月やとと伸きる非の影  
山賊ははくも物りし秋は雪  
水はと星もあらくもととあは  
漱具引ね明り色別より利  
森去りよ海濱も朝や啼く千を  
光陰の隙可嘆矣

素十  
一瓢  
一貫  
曾水  
色川  
嵐吼  
其嘯

行年と云ふはこれと記をなれ流



途あつちりしきのみ時多  
秋風はうつくしき淋し硯石  
付たあむと厚れあ砂う能  
村人も精進とせしや魚の市  
あ鳥れれと組直日向日  
昔も何れにうしろをいり  
又秋やうと灰汁挿月れ影  
暮山とあつちと杖と命う能  
五六天とあ風あう厚れ結

舟唄  
素雪  
不知  
鳥魚  
麻痺  
卜晴  
可晒  
茶好

徒啼や花のちりあき柳舟并  
ふあれよ止し鴉啼五月水

帆舟  
馬位

蝶も花を抜くつるはる片合刀  
桑葉飛んで霧をのひある山路水  
おとひ切て楊枝漱まや秋のし  
あ月やか形しん松の植削  
秋を乃衣に我あれあし  
若清あう大慈大悲れ山つき

樹園  
花仙  
眠花  
大布  
永徳  
豊志

留



夕アもれあ来うう一東飯  
刺楫小憩まうく山はまき  
残るまじりまきく一陽さ一厚  
る月一馬れも絶に取れり  
菜の花や花もとて楳杉ふま  
序もあはれも維ふれあまうめ  
花七日除あそ海まよ春乃ふ  
春とけり多し思ふはまき  
浦山やまみく月来に立候は都

上平 枕宴  
奈良 乞牛  
生取 如舟  
昌同 其雪  
何如 呂同  
風之 可笑  
箕外

漣やお南とせくくふえう  
生折更中くうぬ里れ新茶  
噴く神主ふ新氣林道  
魯れ海庭抄後まは人れ  
厚啼やけ山くまきく白乃月

古人乃詠

きまは馬花見やせそ房り  
お梅や本れるにふま胡の月  
はてをけくた道れ梅酒も

上久登 石水  
白岩 布什  
双田 一畦  
上金井 南文  
江戸 龜菱  
江戸 夷川  
株門 春眠  
眠碎



多ふく種よきく此不花乃種  
気は中此花小後如何之戸式  
一葉よりもろた葉や及ノ椿  
友はもき能く是は花小をり  
感しき此麻に束めてを以り

交通

猫乃子のいりて幼くして春をよめ  
をく食や温泉此涌山と自然高  
此角をれ先母とそめくをるるの如

菊楊 枕巾

榛名 麦四

上白井 沢龍

沼田 麦泉

江戸 嵐六

龍勢

風尾

村名母之ハ向ノ浪ノ  
吾影よ異き蹴砂れかまり刑  
大録のねを隣よ柳の南  
雪や人よと癖の七りあきし

存河

大丸

富水

高野

鳥明

志乃のめにあまらるる船きて山橋  
二羽ばれ秋も着はば 郭公  
契つた録も十之節や后の月  
月丸きゆりに浮りかたは

松島



一層の霧のつゝのきとあれは霧のき  
あゝあゝやめ形を原にきを起る  
若き木にははら〜月此二歳が  
いつち縁のぬきとくあぢ水とあ  
中つくとそ獲れたを中捨ら那  
側本乃石中もあはき花  
度就習と尾花とあはる尾花  
録つゝ船と馬〜〜鳴らあはる

坐床

松桂菴

書部

、 、 、 、 、



